

このページは白紙です。

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。ただし、【一】は省略した部分の説明、【二】は出題者による注です。

【小学三年生の茜は、お母さんといっしょに大きな街から引っ越してきて、今は忠志おじさんと泰子おばさんの家に住んでいます。茜は小学校では英語を習っていませんが、いとこの澄香ちゃんが英語を教えてくれました。英語にすると、自分の身の回りの色々なものが「別のものに見えてくる」と茜は感じています。】

このあたりに住んでいるピープル【二】たちはお互いに知り合いで、新入りの茜たちのことを同じピープルとは思っていない。最初は親切でも、しばらくここに住むとわかると、とたんに警戒する目つきになる。泰子おばさんもそうだ。母ちゃんが「しばらくお世話になります」と言ったときには、「ずつといていいんだよ」と笑ってくれたのに、泰子おばさんの「ずつと」は十日間ぐらいだった。最近茜が、おはよう、おやすみなさい、とあいさつしても、返事をしてくれない。「いただきます」のときは、^①たんぽを荒らすカラスを見る目つきになる。母ちゃんにわざと聞こえるように忠志おじさんに言う。いつまでいる気だろうね。あんた、きちんと食費をもらってよね。

英語だと、おばさんは、アント。ありんだ。【二】「おばさん」も「あり」も、英語では「アント」

澄香ちゃんが英語を教えてくれなくなったのも、きつとアントのせいだ。澄香ちゃんが最後に教えてくれた英語は「パラサイト【二】寄生虫。ほかの動物にくっついて生きる虫」。茜たちのことだそうだ。いまでは茜は、澄香ちゃんの部屋のイラスト英和辞典という本をこっそり持ち出して新しい英語を覚えている。

スタディ。ブック。ペンシル。フレンド。ファミリー。ペアレンツ。【二】勉強。本。えんぴつ。友だち。家族。両親。】

母ちゃんは母ちゃん、最近はずぐにカラスみたいなカーカー声をあげる。仕事がなかなか見つからないからだ。いままですんでいた街では医療事務の仕事をしていたのだが、「近くの大きな病院がなくなっちゃった。私が子どもの頃より田舎になった。事務どころか、医療がない」なんて言ってる。

勝手なことゆーなよ。だったらなんでここに来たんだよ。茜は来なくて、このビレッジ【二】村にきたわけじゃない。学校の友だちと別れなくちゃならないことが決まったとき、悲しくて何日も泣いたのに。いまだって毎日寄せ書きを取り出して眺めているのに。

茜は気に入らなかった。澄香ちゃんはマイタウン【二】私の街」というけど、どこから見てもビレッジなところが。母

やんといっしょに寝ている物置の隣の狭くて湿ったタタミがぶかぶかした部屋が。窓を開けるときまって流れてくる鶏小屋の臭いが。どこを見てもイネしかない風景が。一学年が二クラスしかない小学校が。転校したとたん夏休みになつて遊ぶ相手がいない長い長い夏休みが。

ビレッジは嫌いだ。空以外は、みんな嫌いだ。消えてしまえばいい。

母ちゃんは言う。「もう少し我慢してよ。仕事が見つからないと家も探せないの。生活できないもの」

② 生活なんか嫌いだ。茜はライフがしたい。

茜は石を拾つてたんぽにぽこ投げこんだ。大人は勝手だ。だから茜も勝手にやることにした。今日の茜はただの冒険をしているわけじゃない。大冒険だ。ホーム・ゴーをしてきたのだ。日本語でいうと家出。

行き先は海。それしか決めていない。道の先のどこかに海があるはずだった。去年死んだ、忠志おじさんの家のそばが元氣だったころ、ここから海へ遊びに行ったことを茜は覚えている。父ちゃんもいっしょだった。まだ泳げなくて浮き輪にしがみついていた茜を、海岸にいる母ちゃんたちがガシヤポン人形に見えるぐらい海の先の先まで連れていってくれた。

海に着いたら、海を見るのだ。

彼女は海を見る。英語でいうと、シー・シー・シー。

ここを好きになれないのは、きっと海がないからだ。

茜が二カ月前まで住んでいた街には、海があった。マンションの窓を開ければ、いつも海が見えた。運がいいときにはコンビナートのすき間から船も見えた。色はブルーというより灰色だったけれど、きれいな灰色だった。茜にとって海は、いつもそこにあるものだった。空や酸素や壁紙みたいに。

さあ、急ごう。シー・シー・シー。

【茜は海を目指して歩いていく途中、森島陽太君という男の子に出会います。茜は森島君のことを、英語で「森」という意味の「フォレスト」と呼び、いっしょに海を目指します。途中で雨が降ったので、二人は道ばたで雨宿りをし、それからまた先へ進むことにしました。】

坂を下ると道が広くなって、両側に建物が増えてきた。ここじゃだめだ。もっと見晴らしのいいところに行けば虹が

見えるかもしれない。茜は正面の緑の帯に見える細長い林を指さした。

「あっちに行つて虹をさがそう」

「海はいいの？」

「虹は海にかかるんだよ」

雨が降ってくるまで、ずっと茜とフォレストの前を歩いていた二人の影は、いまは真横をついてくる。いつのまにか影はずいぶん長くなっていた。

緑の帯が近づくと、かすかな音が聞こえてきた。

ざわざわざわ。

ざわざわざわ。

茜は鼻をひくつかせる。波の音に聞こえたのだけれど、海の匂いがしない。茜がよく知っている海はガソリンの匂いをするのだ。

緑の帯に見えた背の低い林の中に入ると、わかめと干し魚をミックスジュースにしたような匂いが強くなった。林の向こうがきらきら光っている。茜は光に向かって駆けだした。

「海だ」

「海だ」

海にはあまり人がいなかった。サーファーをしているピープルが少し。釣りをしているピープルがもつと少し。泳いでいるピープルは、いない。

海はブルーじゃなかった。茜の街の海の灰色でもない。オレンジ色に光っていた。

まぶしい。茜は片手を目の上にあてて波を見つめた。両手で双眼鏡みたたく輪っかをつくつて空との境目を眺めた。

うん、海だ。

元氣だったか、海。

靴と靴下を脱いで海に入った。フォレストも後ろからついてきた。

何度も何度も波を追いかけて走り、同じ回数だけ波に追いかけて砂浜に戻った。それから傘とゴミ袋で魚とりをした。一匹もつかまらないうちに、海からオレンジ色が消えて、魚臭い見渡すかぎりの濁った水だけが残った。

空も急に暗くなった。暗くなったとたん、茜の頭に灯がともった。現実という名前のその灯が、茜の薄もやみたい

な夢と冒険を容赦なく照らし出した。^③ 現実の光をまともにあてられたら、それはどれもこれも、役立たずのがらくたのおもちやだった。

家出はむりだ。一人でどこかに泊まるなんてできっこない。フォレストがいっしょでももちろんおなじ。母ちゃんにガトリング砲みたいなお説教を食らうだろうけど、やつぱり帰るしかない。

【茜は帰ろうと思っていました。そこへ男性が現れます。茜はその人のことを、「大きな男」という意味の「ビッグマン」と呼びます。ビッグマンは茜とフォレストを家に帰そうとします。しかし、フォレストがいやだったので、自分の住むブルーのシートでできた家に二人を泊めてくれました。夜中になって、茜は目を覚ましました。】

毛布を抜け出して、外へ顔を出してみた。

星は見えなかった。

そのかわり月が出ていた。ビッグマンの家を囲んだ木々の先に、海が見えた。その上に月が出ているのだ。

英語でいうと、月はムーン。今夜の月は、まんまるムーンだ。

茜は靴をはいて海岸へ歩いた。

月の真下の海には、月の光の細い帯ができていた。まるで一本の道みたいに。

想像の中で茜は、その光の道を歩いた。靴を脱ぐ必要はない。海の上を歩ける道なのだ。光の道はあつたかくて、ふわふわやわらかかった。

そうだ。明日はまた新しい道を歩いてみよう。もつと遠くへ行ってみよう。いまはそう思えた。ほんとうのことを言えば、今朝、家を出たときには、夕方には怖くなつて帰るだろうって自分でもわかっていた。

でも帰らずに、ここにいる。

そのことに茜は興奮していた。

誰もいない夜の海岸にひとりであることを忘れるほど興奮していた。ぜんぜん怖くなかった。初めてひとりで見る海は、茜を抱きしめて、茜の体に新しい何かを注ぎこんでくれる気がした。月の光みたいな何かだ。

^④ ありがとう、海。お前もがんばれよ。

(萩原浩「空は今日もスカイ」より)

問一 — ①「たんぽを荒らすカラスを見る目つき」とありますが、ここで茜は泰子おばさんのどのような気持ちを読み取っていますか。説明しなさい。

問二 — ②「生活なんか嫌いだ。茜はライフがしたい」とありますが、ここには茜のどのような気持ちが表れていますか。説明しなさい。

問三 — ③「現実の光をまともにあてられたら、それはどれもこれも、役立たずのがらくたのおもちやだった」とありますが、「夢と冒険」が「がらくたのおもちや」であるとはどういうことですか。説明しなさい。

問四 — ④「ありがとう、海」とありますが、なぜ茜は海に感謝しているのですか。説明しなさい。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。ただし、「Ⅱ」は出題者による注です。

エチオピアでの経験から話を始めよう。最初にエチオピアを訪れたのは、もう二十年近く前のことだ。ほとんど海外に出たこともなかった二十歳そこそのころ。十カ月あまりの滞在期間の大半をエチオピア人に囲まれて過ごした。それまで、自分はあまり感情的にならない人間だと思っていた。人とぶつかることもそれほどなく、どちらかといえば冷めた少年だった。①それが、エチオピアにいるときは、まるで違っていた。

なにをやるにしても、物事がすんなり運ばない。タクシーに乗るにも、物を買うにも、値段の交渉から始まる。町を歩けば、子どもたちにおちよくられ、大人からは質問攻めにあう。調査のために役所を訪れると、「今日は人がいないから明日来い」と何日も引き延ばされる。「ここじゃない、あっちの窓口だ」と、たらいまわしにされる。話がうまくいったと思ったら最後に賄賂を②「ヨウキユウ」される……。

言葉の通じにくさもあって、懸命に身振り手振りを交えて話したり、大声を出して激昂してしまったりする自分がいた。

村で過ごしているあいだも、生活のすべてがつねに他人との関わりの中にあって、ひとりのプライベートな時間など、ほとんどない。いい意味でも、悪い意味でも、つねにある種の刺激にさらされ続けていた。食事のときは、いつもみんなでひとつの大きな皿を囲み、「もつと食べろ」と声をかけあい、互いに気遣いながら食べていた。村にはまだ電気がなかった。食後はランプの灯りのもとで、おじいさんの話に耳を傾け、息子たちと腹を抱えて笑い転げたり、真顔で驚いたり、にぎやかで心温まる時間があつた。

村のなかにひとり「外国人」がいることで、いろいろなことが起きて、なぜこんなにうまくいかないんだと、涙が止まらない日もあつた。

毎朝、木陰にテーブルを出して、前日の日記をつけるのが日課だった。ふと見上げると、抜けるような青空から木漏れ日がさし、小鳥のさえずりだけが聞こえる。さわやかな風に梢が揺れる。おばあさんが炒るコーヒーのいい香りが漂ってくる。自分はなんて幸せなんだろうと、心からうっとりした。

腹の底から笑ったり、激しく憤慨したり、幸福感に浸ったり、毎日が喜怒哀楽に満ちた時間だった。顔の筋肉も休まることなく、つねにいろんな表情を浮かべていた気がする。

そんな生活を終えて、日本に戻ったとき、不思議な感覚に陥った。関西国際空港に着くと、すべてがすんなり進んでいく。なんの不自由も、憤りや戸惑いも感じる必要がない。バスのチケットは自動券売機ですぐに買えて、数秒も違わず③「ティコク」びつたりに出発する。動き出したバスに向かって深々とお辞儀する女性従業員の姿に、びっくりして振り返ってしまった。

人との関わりの中かで生じる厄介で面倒なことが注意深く取り除かれ、できるだけストレスを感じないで④「ス」システムがつくられていた。

おそらく、お辞儀する女性は感情を交えて関わり合う「人」ではなく、券売機の「ご利用ありがとうございます」という機械音と同じ「記号」だった。

つねに心に波風が立たず、一定の振幅におさまるように保たれている。その洗練された仕組みの数々に、⑤「逆カルチャーショック」を受けた。

そのうち、自分がもとの感情の起伏に乏しい「自分」に戻っていることに気づいた。顔の表情筋の動きも、すっかり緩慢になった。顔つきまで変わっていたかもしれない。いったい、エチオピアにいたときの「自分」は「だれ」だったのだろうか？ そんなことも考えた。

でも日本の生活で、まったく感情が生じないわけではなかった。テレビでは、新商品を⑥「センデン」するために過剰なくらい趣向を凝らした「Ⅱ工夫した」CMが繰り返し流され、物欲をかき立てていた。それまで疑問もなく観ていたお笑い番組も、無理に笑うという「反応」を強いられているように思えた。そんなとき、⑦「ひとりテレビを観ながら浮かぶ「笑い」は、「感情」と呼ぶにはほど遠い、薄っぺらで、すぐに跡形もなく消えてしまう軽いものだった。

多くの感情のなかで、特定の感情／欲求のみが喚起され「Ⅱ呼び起こされ」、多くは抑制されて「Ⅱおさえ込まれて」いるような感覚。エチオピアにいたときにくらべ、自分のなかに生じる感情の動きに、ある種の「いびつさ」「ゆがみ」を感じた。どこか意図的に操作されているようにも思えた。

(松村圭一郎『うしろめたさの人類学』より)

問一 Ⅱ 1、4 のカタカナを漢字に直さない。一画ずつ、ていねいに書くこと。

問二 ① 「それが、エチオピアにいるときは、まるで違っていた」とありますが、筆者がそう言うのはエチオピアでの生活がどのようなものだったからですか。説明しなさい。

問三 ② 「逆カルチャーショックを受けた」とはどういうことですか。説明しなさい。ただし、カルチャーショックとは、自分とは異なる文化に接したときに受ける精神的な衝撃しょうげきのことを言います。

問四 ③ で筆者が「ひとりテレビを観ながら浮かぶ『笑い』を『感情』と呼ぶにはほど遠い」と表現しているのはなぜだと考えられますか。説明しなさい。

このページより後ろは白紙です。

A 国 語

19

解 答 用 紙

受 験 番 号

氏 名

一

問 一

問 二

問 三

問 四

二

問 一

1

2

3
む

4

問 二

問 三

問 四